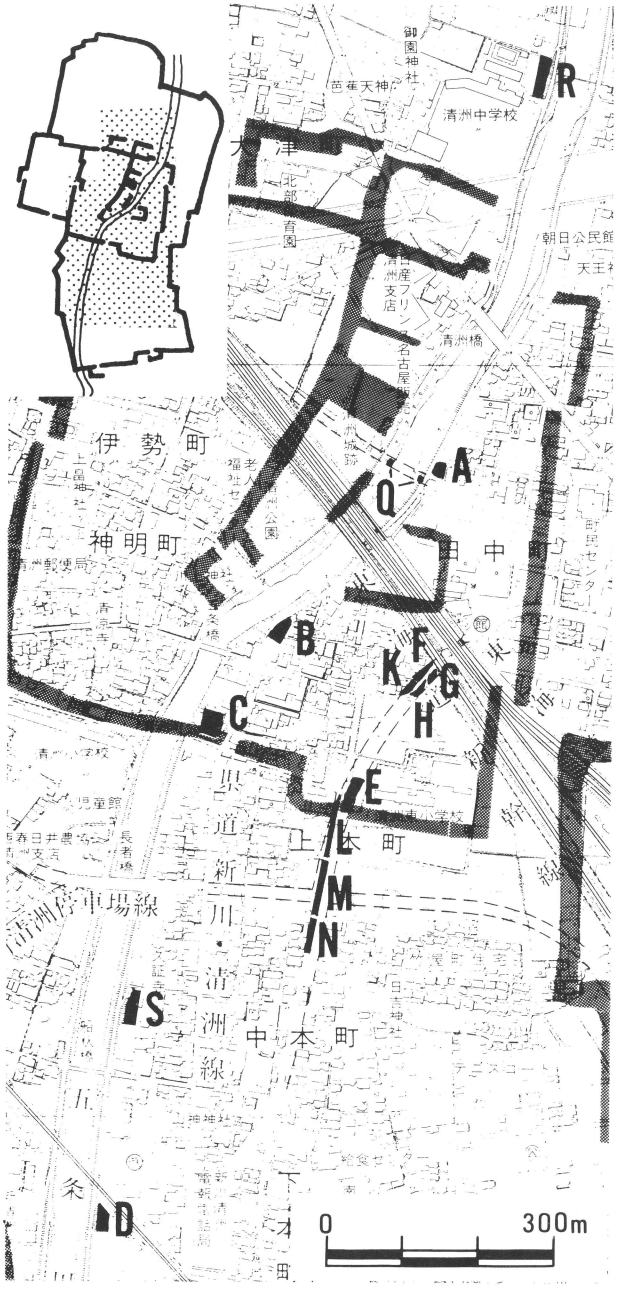
# 清洲城下町遺跡（きよすじょうかまち）




第Ｉ図　63年度調査区位置図
▒　堀の復元（千田嘉博氏による）

## 調査の経過

清洲城下町遺跡は、濃尾平野を流れる五条川中流域に形成された自然堤防及び後背湿地上に位置する。織田信長ゆかりの清須城を中心に清洲町のほぼ全域に広がり、戦国時代から江戸時代初期までを主とする遺跡である。

環状２号線建設(昭和59年度～61年度)、五条川改修（61年度～現在)、県道清洲・新川線拡幅(62年度～現在）の各事業に伴って発掘調査を進めている。本年度の発掘調査は、河川改修関係（Ａ～Ｄ・Ｑ～Ｓ区)、県道関係（Ｅ～Ｎ区）の合計15調査区、6660m²を対象とし、これまでの総調査面積は35,891m²に上る。

既設の地下埋設物による遺構の寸断などの支障もあったが、おおむね良好な状態で遺構・遺物を検出することができた。

時期区分は、Ｉ期（古墳時代）II期（奈良、平安時代）III期（鎌倉、室町時代）IV期（城下町期）V期（宿場町期）である。

（水谷朋和）

## 五条川河川改修関係

### 遺構

本年度は五条川河川改修に伴う発掘調査を７ヶ所で行い、城下町期を中心とした遺構を検出し得た。以下調査区ごとにその概要を記す。

Ａ区　検出遺構は、室町時代（ピット群）と城下町期後期の２期にわたる。特に城下町期後期の南北に走行する幅５ｍの溝を検出したが、調査区の制約から、性格は不明である。

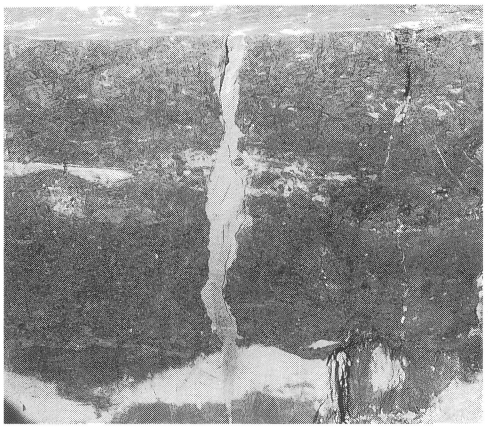
Ｂ区　城下町期後期の溝１条、井戸３基、土坑等を検出した。井戸はすべて桶組みで、ＳＥ03からは廃絶時に投棄されたと思われる礫が深さ３ｍ以上にわたって堆積していた。

Ｃ区　城下町期の遺構として、大溝１条、井戸２基、自然流路２条等を検出した。大溝（ＳＤ14）は、西側を流れる五条川に接しておらず、一段テラスをもって更に深く掘り込まれていた。大溝の底部から面的な広がりをもつ礫群を検出したが、遺構に伴うものとは考えにくく廃絶時に一括投棄されたと考えられる。城下町期遺構の削平をうけ正確な規模は確認できなかったが、『清須村古城絵図』（蓬左文庫蔵）などにみられる清須城を巡る三重の堀のうち「中堀」に相当すると思われる。次に、宿場町期の遺構としては、17世紀末の良好な遺物が出土した廃棄土坑（ＳＸ05）、19世紀の井戸、溝等がみられた。

以上の遺構のほかに、地震による地割れ痕（８本）、噴砂がみられる。この現象に関する地震の時期は新旧二時期に分かれ、新期は濃尾地震、旧期は天正地震と推定される。

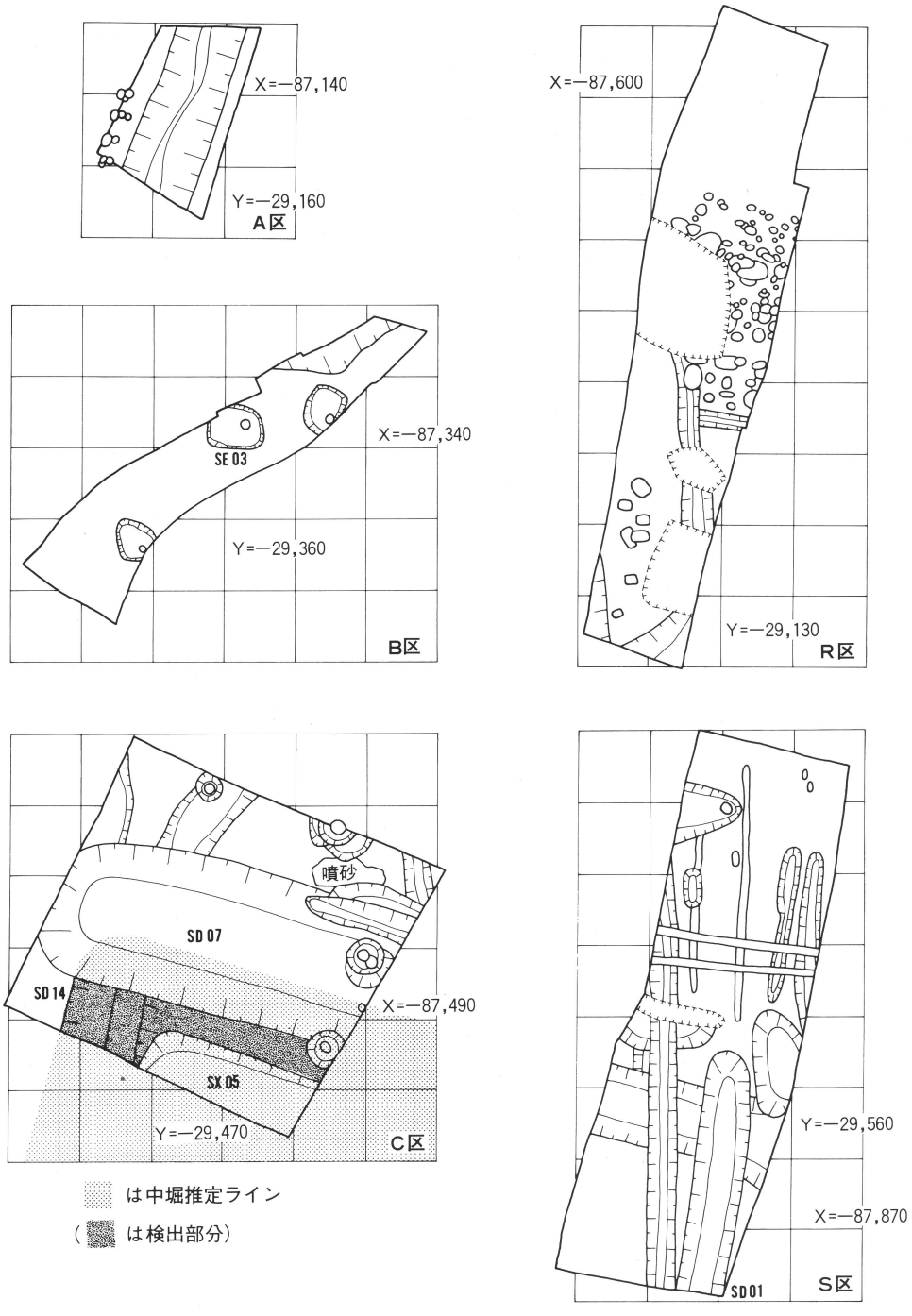
Ｒ区　城下町期後期の溝、土坑、井戸及び自然流路を検出した。自然流路は旧五条川と考えられ、その他の遺構はこの自然流路を整地した後につくられている。逆に整地層の南北両側のシルト層では同時期の遺構はほとんど検出しえなかった。

Ｓ区　検出遺構は、溝10条、井戸１基、土坑10基である。溝は南北方向に６条、東西方向に４条走行し、特にＳＤ01からは城下町期後期の良好な遺物が出土した。（川井啓介）



Ｃ区　地震痕

Ｃ区　ＳＤ14出土礫群




第２図　五条川河川改修関係遺構図（1/500）

**出土遺物**

出土遺物は、陶磁器類がその大半を占める。他に、下駄・漆器・曲物などの木製品、石臼・五輪塔・硯・砥石などの石製品、キセル・銭貨・釘などの金属製品等が出土している。

これらの遺物の大半は、城下町期後期に属するものであるが、C区を中心に江戸時代（17世紀～19世紀）の遺物も出土している。

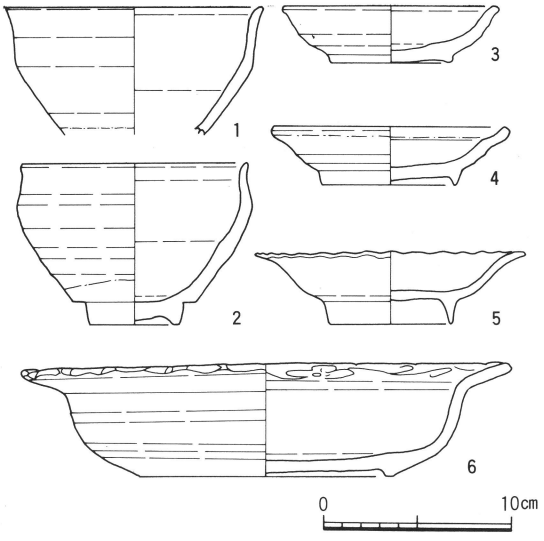
ここでは、城下町期後期の遺物として、中堀に相当すると考えられるC区ＳＤ14およびＳ区ＳＤ01の出土遺物を取りあげる。また江戸時代の遺物としては、C区ＳＸ05から一括して出土した遺物を取りあげる。以下はその代表的な出土遺物の概略である。

C区ＳＤ14（第３図１～５）　陶磁器類は瀬戸・美濃系、常滑系の製品が多く、備前系の擂鉢も出土している。１は鉄釉天目茶椀、２は銅緑釉天目茶椀、３・５は長石釉皿、４は透明釉皿で内面に鉄絵が施されている。これらはすべて瀬戸・美濃系の製品で、16世紀後半から17世紀中ごろに比定される。

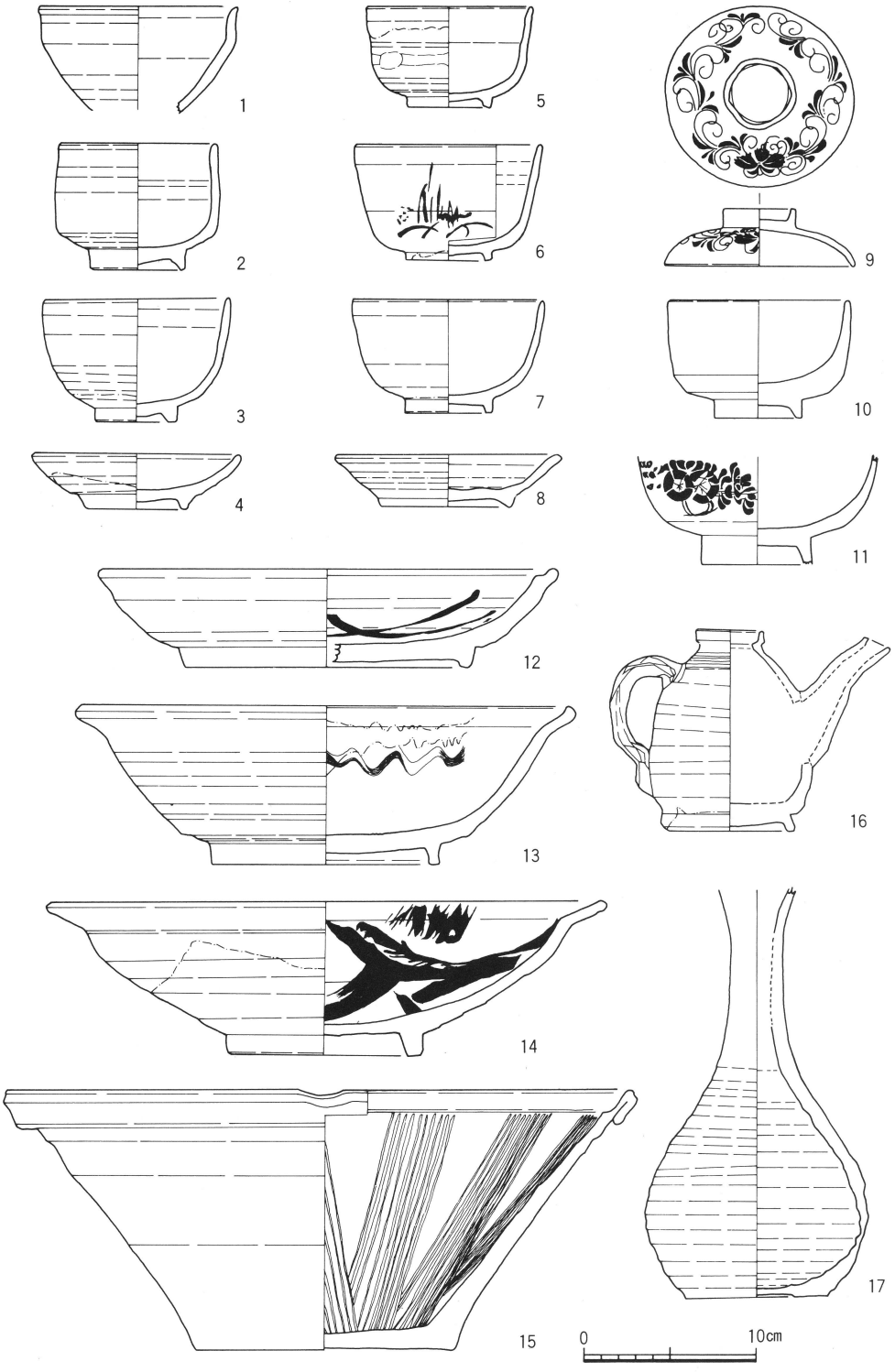
Ｓ区ＳＤ01（第３図６）　16世紀後半から17世紀初頭の、瀬戸・美濃系を中心とする陶磁器類が多く出土しており、土師器の皿や鍋もみられた。６は内面に草花文を施した黄瀬戸の鉢である。

C区ＳＸ05（第４図１～17）　瀬戸・美濃系、常滑系、唐津系等の陶磁器類が多く出土した他、木製品も出土している。１は鉄釉天目茶椀、２・３は鉄釉椀、５は腰錆茶椀、６・７は京焼椀、４は灰釉皿、８は長石釉皿である。また12・13は瀬戸・美濃系の鉢、14は唐津系の鉢、15は瀬戸・美濃系の擂鉢、16は鉄釉の水注、17は鉄釉の徳利である。木製品は漆器類・曲物・下駄などが出土し、９・10・11は漆器類である。９は外面が黒漆、内面が朱漆塗りの蓋で、外面に施された文様は朱漆で描かれている。10は内外面が朱漆塗りの椀である。また、11は外面が黒漆、内面が朱漆塗りの椀で、９と同様に外面に朱漆塗りの文様が描かれている。いずれも、17世紀後半から18世紀初頭にかけての遺物である。

（日比　宰）




第３図　C区・Ｓ区出土遺物




第４図　Ｃ区ＳＸ05出土遺物

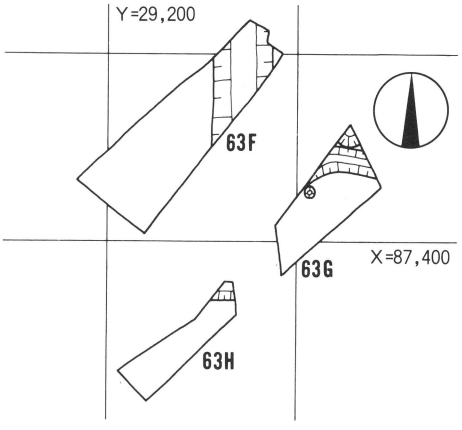
## 県道清洲・新川線関係

### 遺構

本年度の調査では、奈良・平安時代および城下町期の遺構が検出された。

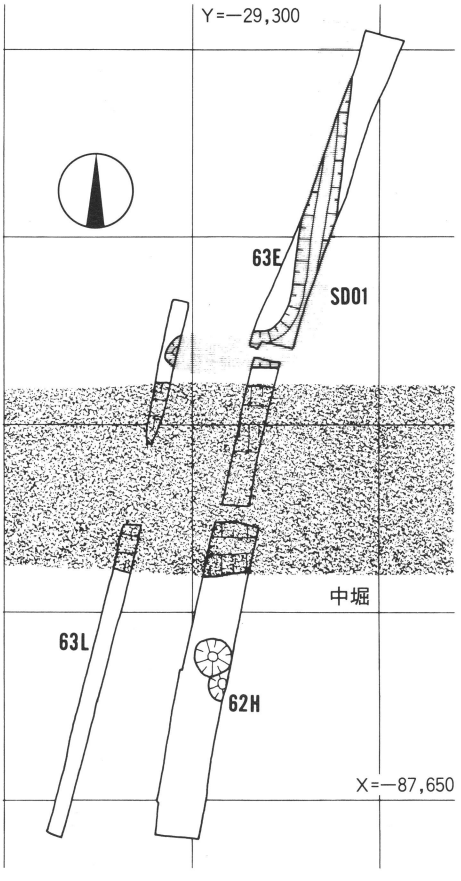
奈良・平安時代の遺構として、E・N区で竪穴住居が検出された。調査区が狭いため全容が把握できないが、いづれも方形プランをなし、カマドは持たない。遺物は須恵器、土師器が若干出土したのみであった。G・H区でも明瞭な遺構こそ確認できなかったが、奈良時代の須恵器等が出土した。

城下町期前期の遺構として、E・G・L区において、L字に屈曲する溝を2条検出した。いづれも幅約5m、深さ約1.5mを測るが、溝の内側では同時期の遺構は確認できなかった。このような溝はE区でも検出されており、屋敷地を方形に囲郭する溝の一部と考えられる。特に、E・L区で検出されたSD01は南北方向の長さが35m以上を測り、南端部で西の方向に屈曲する。屈曲した地点から約20mのところで溝は終結し、ここに土橋が存在したことが推定される。このSD01から陶磁器類の他、土師器皿が多量に出土した。




第5図　F・G・H区遺構図（1/1000）

E区　SD01土師器皿出土状態



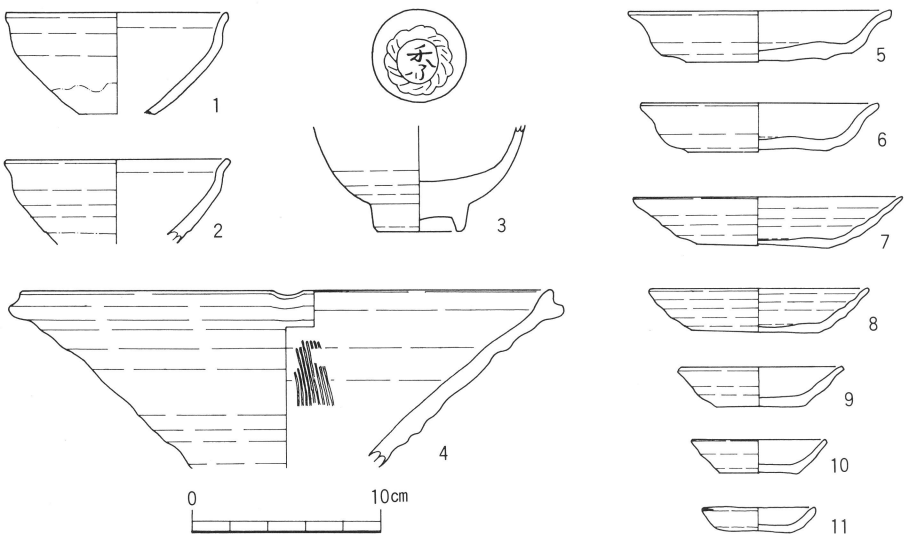

第6図　62H・63E・63L区遺構図（1/1000）

城下町期後期の遺構として、溝と井戸が検出できた。Ｅ・Ｌ区で確認された大溝は、62Ｈ区で検出した大溝ＳＤ01と同一のもので、「中堀」に比定される。幅は約25ｍを測り、16世紀末から17世紀初頭の陶磁器類等が出土した。

**出土遺物**

出土遺物は、奈良・平安時代の須恵器や土師器、城下町期の陶磁器類や木製品等が存在する。このうち、Ｅ区ＳＤ01から出土した土師器皿を紹介する（第７図）。

土師器皿は主にＳＤ01の西肩斜面から一括して出土した。出土状況から見て、ＳＤ01が埋覆する過程で、大部分の皿を上に向けた状態で廃棄されたものと思われる。この土師器皿は法量から大・小の２種に大別できるが、更に形態から４類に分類できる。Ａ類はロクロ成形の土師器皿で、体部下部に稜を持ち、やや外反しながら立上がるものである（Ａ１類－口径14.0～15.0cm・Ａ２類－口径12.0～13.5cm）。Ｂ類はロクロ成形で、体部は直線的に立上がり、器厚がやや薄いものである（Ｂ１類－口径14.0～15.0cm・Ｂ２類－口径12.0～13.0cm）。Ｃ類はロクロ成形で、体部中央に稜をもち、口縁部でやや外反するものである（Ｃ１類－口径8.0～9.0cm・Ｃ２類－口径6.5～7.5cm）。Ｄ類は非ロクロ成形の土師器皿で、口縁部にナデ調整を施すものである（口径5.0～6.0cm）。今回一括して出土した土師器皿は321点を数えるが、その内訳はＡ類111点、Ｂ類31点、Ｃ類141点、Ｄ類38点である。これらの土師器皿は炭化物の付着がほとんど見られず、破損したものが少ないことなどから、短期間に使用・廃棄されたものと推測され、15世紀後半代に比定できる。　　（鈴木正貴）




第７図　Ｅ区ＳＤ01　出土遺物
１・２　鉄釉天目茶椀　　３　青磁椀　　４　擂鉢　　５～11　土師器皿

## まとめ

今年度の調査成果を時期ごとに整理しておく。

Ⅰ期（古墳時代）　今年度の調査では、遺構・遺物はほとんど確認できなかった。特にG・H区で当該期の遺構・遺物が存在しないことは、古墳時代の集落跡の拡がりは62E区を北限とすることを示すであろう。

Ⅱ期（奈良・平安時代）　五条川東岸に位置する自然堤防上に集落跡等が営まれる時期である。検出された遺構は、主として奈良時代から平安時代前期の竪穴住居のみであり、昨年度確認したような墨書土器を伴う平安時代後期の遺構・遺物は検出できなかった。

Ⅳ－１期（城下町期前期）　織田信雄が大改修を実施する1586年以前の清須城下町の時期である。五条川東岸に位置するE～L区では、屋敷地を囲郭する幅５ｍ前後を測る方形の溝の一部が、昨年度に引き続き検出された。これは、この地区に方形の居館跡群が集中して展開するものと見られ、前期の清須城下町の構造解明の一助となるだろう。ただし、今回の調査では、囲郭する溝に土橋を有する例の他には、方形区画内の構造は明らかにできなかった。また、C区北西部で自然流路の一部を確認し、62C区で検出した旧五条川と見られる自然流路は西に大きく蛇行するものと思われる。

Ⅳ－２期（城下町期後期）　大改修以降清須越までの城下町の時期であり、良好な遺構・遺物を確認した。特にC・E・L区では幅約25ｍの大溝が検出され、埋没状態・位置から『清須村古城絵図』に見られる「中堀」に比定できる。「中堀」は旧五条川と接続せず、川の水を直接利用していないことが推定される。また、C区では17世紀中頃の遺物も伴出することから、「清須越」以降も「中堀」が存続した可能性がある。更に、C区で検出した「中堀」とE・L区で検出した「中堀」は位置関係が若干ずれており、この間に「虎口」などが存在することが考えられる。また、R区では場所による土坑などの遺構の密度の差があり、空間構成を検証する上で一考を要する。

Ⅴ期（宿場町期）　C区において19世紀の井戸群を検出した。井戸は切り合いを持つものもみられ、旧美濃街道方向に並ぶが、C区の南で19世紀の遺構が稀薄となり、当該期の宿場町の南端部に位置するものと考えられる。また、17～18世紀の比較的規模の大きい遺構群が存在するが、その意味付けは今後の課題である。

最後に、今年度の調査で新たに確認された地震痕について触れる。地震痕は切り合い関係などから、天正地震（1586）によるものと濃尾地震（1891）によるものが存在する。特に前者は、大改修の直前に発生したことから城下町期の前期と後期の遺構群を区分する重要なカギとなる一方、清須城下町に与えた地震の影響も問題となるだろう。[注]（鈴木正貴）

注　森勇一・鈴木正貴　「愛知県清洲城下町遺跡における地震痕の発見とその意義」　『活断層研究第７号』1989